



閑家具と禪房十事



館 隆 志

画：正親里紗

みなさんこんにちは。花園大学の館隆志と申します。私は臨済宗の研究をしています。が、福井県にある永平寺で三年間修行した曹洞宗の僧侶です。この度、ご縁をいただき本号より、鎌倉時代の禪寺で使われていた道具について連載することになりました。

「禪」は、二五〇〇年以上前のお釈迦さまの時代から存在する修行方法で、坐って行われたので「坐禪」と漢訳されました。お釈迦さまは菩提樹の下で坐禪をして悟りを開かれ、ブツダ（覚者）となりましたが、その時代には、草を敷いて坐禪するだけで、僧侶が持つ道具としては、袈裟以外に、托鉢や食事用の器以外は必要とされていませんでした。

時代が経過し、六世紀前半にインドから達磨大師が中国にやってきて禪を伝えます。達磨大師は「面壁九年」の言葉で知られるように、嵩山少林寺の洞窟で坐禅したと伝えられています。

その後、達磨大師を祖とする集団は、いくつかの系統に分かれながら発展し、禪宗と呼ばれるようになりました。そして、唐の時代になり、馬祖道一禪師の頃、新たな展開を遂げます。馬祖禪師は「即心是仏」、つまり心こそが仏であるとし、更に「平常心是道」、日常の心こそが仏道であると説かれました。そしてこの思想は、禪宗に広く受容されることとなります。

馬祖禪師の門弟に、百丈懷海禪師という方がおられます。ある日、年老いた百丈禪師に畑仕事を休んでもらおうと、修行僧たちが農具を隠したところ、百丈禪師はその日の食事をしませんでした。弟子が百丈禪師に「なぜ食事をしないのですか」と尋ねたところ、百丈禪師は「一日作さざれば、一日食らわず」と答えました。今日、私は修行をしていないから食事はとらないというのです。労働も修行の一つとして重視していたのですね。

ところが、この話は禪宗だけに通じる独自のもので、当時の仏教の世界では一般的な話ではありませんでした。というのは、本来、労働や料理は「戒律」で禁止されていたからです。でも禪宗ではそれらを規則の中に取り入れ、修行の一環として組み込んでいきます。この禪宗独自の規則は「清規」と呼ばれます。禪では日常の心を重んじていたので、日常の生活を重視することになったのです。

更に禪宗では、日常生活で用いられる道具さえも重要なものと考えられるようになりました。道具の中には、お釈迦さまや達磨大師の時代にはなかった物もありますが、日常生活を重視する以上、日常の修行で欠くことのできない道具も出てきます。

禪の道具の話に入るまえに、禪でよく使う「閑家具」という禪語を紹介したいと思います。皆さんの家にも、きっと実際には使っていない道具があることでしょう。「閑家具」



とは無用な道具のことで、必要のない物の代名詞として使われる言葉です。

禪寺では「閑家具」の無い簡素な生活が好まれました。たとえば妙心寺の開山である閑山さんぜん玄げん禅師の伝記には、「殿堂でんどうの荘嚴そうげんに意無いむし、道具飾らず」「部屋へやに長物ながもの無し」と伝えられています。お寺の装飾を簡素にし、無用な物は置かなかつたというのです。

一方、日本に禪が入ってきた鎌倉時代、禪寺に必要な道具として、「禪房十事」と呼ばれる十種類の道具がありました。当時、中国から日本にやってきた大休正念だいしゅうしやうねん禅師や鏡堂きやうどう覚かく円えん禅師、日本僧の秋澗道泉しゅうくわんどうせん禅師の語録にある「禪房十事」という偈頌げしゆに見える十種の道具がそれです。

偈頌とは、詩句の形で仏の徳を賛嘆し、仏の教えを述べたものです。禪寺で使われている十種の道具が具そなえた徳を賛嘆した言葉が、鎌倉時代の禅僧によって残されているので

す。この偈頌の存在は、簡素な生活のなかにも、欠かすことができない道具があったことを示しています。残念ながら、この「禪房十事」という形式は後の時代には継承されなかつたようですが、その内容は当時の修行生活を知る上ではとても貴重なものです。

「禪房十事」という言葉は、辞書に載っていませんし、書籍の記述でも見かけることがありません。目下、論文にまとめるために研究をしています。目下、論文にまとめるために研究をしていますが、その最新の成果を手掛かりとしながら、鎌倉時代の禅の道具を一つずつ紹介し、現在の禅宗でどのように受け継がれているのか、次号以降お話しいたします。

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭溪道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。